

〔実践研究（フィルムプレゼンテーション）〕

## オーストラリア・クイーンズランド州ヌーサでのホームステイ・自然活動を通してのレジャー・レクリエーション

- 上 村 都貴絵（貞静学園）  
 矢 川 律 子（Cultural Exchange Holidays オーストラリア理事）  
 石 井 允（立教大学）  
 鈴 木 秀 雄（関東学院大学）  
 坂 口 正 治（東洋大学短期大学）  
 加 藤 恵 子（立教大学研究生）

キーワード：レジャー、レクリエーション、自然活動、ホームステイ（ヌーサステイ）  
 （本文中のマーク\*\*印はフィルムプレゼンテーションの中、スライドで説明される事柄であることを示す。）

### I. はじめに

学会の長年の懸案であったレジャー・レクリエーション研究と実践の融合という視点から、記念大会にあたる今学会で初めての試みとして実践研究報告がなされるとのことから、オーストラリアにおいて、すでに研究と実践を融合させるために諸活動の展開をしており、本学会でのヌーサに関する研究発表（演題：「国際交流で知る地域づくりの視点～オーストラリア・クイーンズランド州ヌーサでのホームステイ・自然活動を通して～」）と共に実践研究報告（フィルムプレゼンテーション）するものである。

ヌーサ\*\*（Noosa, アボリジニの言葉で木陰の意）は、オーストラリア大陸、東の玄関口ブリスベン（クイーンズランド州都）から北へ約130Kmに位置し、サンシャインコーストの中で最も洗練された自然豊かな町で、875Km<sup>2</sup>（横浜市のほぼ2倍）の面積で、人口29,000人を有し、年間を通じて温暖な気候の中、海と川、森と山、に囲まれ、オーストラリアの人々にとっても心地よい、さわやかなイメージの地となっている。ヌーサの町の文化・環境的価値も、素朴さを失わないための規則づくりや、文化・環境的価値を高めていくための不断の努力により、形成されたもので、決して自然発生的に生まれたものではない。意識できないものを意識し、認識しようという姿勢が、環境を守り、自然を残し、人々が豊かにゆとりをもって生活していくための基本は何かを学びとり、経済最優先ではない発想にたどり着いたといえる。そこから“自然”と“人間社会”との距離（隔たり）が短縮され、本来ならば、文明により引き裂かれ、不幸にもできてしまうであろう人間と自然との間の大きなギャップ（溝）の存在というものを回避できていることが理解できる。

河口からヌーサリバーをカヌーやヨットで遡るとき、空き缶やプラスチック類のゴミがなく、生活汚染もない川のきれいさに驚く。この見事さは自然の力だけでなく、自然を汚さない、壊さない、いじらない、という考えのもとに、そこに住む人が自然とどう向き合っていくべきかという共通認識ができあがっているからであり、町づくり、自然づくり、人づくりの基本であることを痛感する。既に自己実現したい要求に応えられる流れの創造<sup>2)</sup>を有し“ゆとり”や“余裕”、“豊かさ”までも実感できるこのような地に、レジャー・レクリエーションに関する研究機関（組織）が構成されることを耳にするとき、羨ましさと共に感動さえ覚えるのである。

## II. 実践研究の目的

この実践研究の課題に関し、それぞれの共同研究者が5年間にわたりヌーサにおいて実施した、第1回（1991年8月11日～8月25日）から第7回（1995年3月20日～4月1日）までの総合的な実践活動から、現地ヌーサでのレジャー・レクリエーションの意味合いと位置づけの明確化、ホームステイ（むしろヌーサステイ = Noosa Stay と表現すべきであろう）の意義・価値、そしてあらゆる自然活動を通して実感し、感動し、本来のレジャー・レクリエーションはどうあるべきなのかについて感覚的視点のみならず論理的視野からも、強く影響を受けた事象（事柄）について実践活動報告することが目的である。この実践研究推進にあたっては、オーストラリア・ヌーサの現地法人であるKGコーポレーション・インターナショナル（代表：川辺滋氏）より、現地に於いても、国内で実施したインタビュー（1995年6月23日於：横浜東急ホテル）においても、資料提供はもとより多大のご協力をいただいた。

## III. 実践活動の報告

レジャー・レクリエーションの視点\*\*、教育効果（側面）的視点\*\*からのホームステイ（ヌーサステイ）\*\*、そして諸自然活動\*\*（①ホースライディング、②カヌー&ヨット、③ジョイフライト、④キャンピング&ピクニック、⑤ハーレーダビッドソンライド、⑥スキューバダイビング、⑦スイミング、⑧フィッシング、⑨ヘイロッキング、⑩ワイルドライフウォッチング⑪ファウナ&フローラウォッチング、⑫ナショナルパークトレッキング、⑬スターナイト、⑭ネイチャリング、⑮バイオ&エコスタディー等）を実践報告し、ヌーサにおいて、どのようなレジャー・レクリエーション機能により“ゆとり”や“余裕”、そして“豊かさ”が生まれ実感できているのかを多角的に探究する。

## IV. まとめ

ある社会規範が行動を変え、表層的判断を加えていくのだが、レジャー・レクリエーションに関する限り、既成の規範や判断を冷静に再認識し、余暇社会化へと加速している現代では、個人の価値観を大切にしつつ、ゆとりや豊かさに対する新しい社会規範の確立、いわゆる新しい価値観づくりが重要である。生まれたままの自然を残し、大切に育てているヌーサでは、決して経済優先ではない視野（意識）で社会システムを創りあげていることがわかる。しかし実践研究報告に際し、誤解を避けるべきことは、新しさを求めて外国のものを崇める単なる“拝外”のような姿勢でヌーサが全て良いのだなどと論ずるつもりはないということである。むしろヌーサでの実践活動で、本来あるべきレジャー・レクリエーションに関して何かしらの指針を得ることができることを求めて実践報告しようとするものである。

## [引用文献]

- 1) 矢川律子、鈴木秀雄、「国際交流で知る地域づくり・町おこし～足元の文化・環境の見直しから～」『日経Uターン』1995年、Vol.7、夏号、p. 122～123.
- 2) 鈴木秀雄、「余暇活動を通してUターンのチャンスを考える～"地域特性の創造"と"まち起こし"の視点から若者の活動や体験をどうとらえるか～」『日経Uターン』1995年、Vol.5、1月号、p. 96～97.